特253
725

鈴澤惟安著

禪的生活

東京鴻盟社發行

始

特253
725

禪的生活

岸澤惟安著

東京鴻盟社發行

昭和帝國文庫

禪的生活

岸澤惟安著

佛敎がわが國にわたつてのち、如何にわが國家に影響したか、といふことを話してみませう。

いま村長さんのお話に、聯盟をつくつたのは米國の前大統領ウイルソン氏であつたと申されたが、その動機は曹洞宗大本山永平寺前貫首であつた日置默仙禪師が、まだ可睡齋住職であつたとき、佛敎大會に臨場のため、アメリカにゆかれ、したしくウイルソン氏を白堊宮にお訪ねして

佛敎は慈悲を以て根本とし、耶蘇敎は博愛を以て主義とする。博愛と慈悲と、その名はことなれども、人をすくふといふ意味においては同一だ。もし老衲にその職責と權能とがあれば、みづから起つて仲裁することをはばからぬが、あやにく老衲にはその職責と權能がない、一つあなたが起つて獨逸國とその對戰國との中間にたち、講和させてほしい。

と忠告した。ウイルソン氏もよろこんで引き受けられた。これが世界戰爭のやまるもとになつて、聯盟が出來たのである。

日置禪師が、ウイルソン氏に忠告したのが根本となつて聯盟が出來たのであるから、佛敎の慈悲が世のなかに活動して、世界の平和を維持することになつたのだ。

一體といふものが世人に忘れられて無意味のやうにおもはれてゐるが、そんなものではない。佛敎の生命はどこにあるか、表面には解らぬが、いつの時代でも佛敎が底からとなつて社會を維持してゐる。佛敎をはなれて生活することはほとんど困難で

ある。

日本で佛敎歷史の權威者といへば、何といふても鷲尾博士を推す。博士は現に東大にあつまつてゐる佛敎に關する史料を調査してをらるるが、博士一代にはしらべきれぬほど澤山な史料があつまつてゐる。その史料がのこらずしらべあがると、これまでの歷史は大分くつがへされるとのことだ。

その鷲尾博士がかつて、日本歷史―佛敎―戰爭―佛敎―刀劍のさやぬきだけになる。

と戰爭―佛敎―刀劍のさやぬきだけになる。

佛敎が戰爭のうへにどれだけ影響してゐるか、その解りきつた證據は、彼の川中島の戰爭だ。川中島の戰爭は、上杉謙信公と武田信玄公の戰爭といふてゐるが、わしのところでは曹洞禪と臨濟禪の戰爭だ。

信玄公の信仰をつくつたもと、精神をつくつた根柢は何か、いはく臨濟禪。それが信玄公の精神をつくつた根柢だ。信仰をつくりあげたもとだ。信玄公は甲州の慧林寺

快川禪師といふ善知識について坐禪なされた。その坐禪が信玄公の全身心となつて、一一戰爭のうへにあらはれた。それだから信玄公の策戰は臨濟禪の活鱗鱗地だ。

謙信公は七歳のときより曹洞宗林泉寺に入りて禪的生活に慣習し、のち上洛のちなみ、紫野大德寺徹岫宗九和尚につき三歸戒をうけ、高野山にゆき寶幢淸胤法印より眞言の密法をきき、ことに林泉寺七世益翁宗謙和尚、または大乘寺長海和尚等に參じた。その不識庵と號せしは、達磨不識の公案にもとづく。「上杉謙信公と林泉寺」と題する書中に

公は諸宗に法緣淺からざりしも、就中其造詣の最も深かりしは禪學なりき。入つては毘沙門堂看經所に思を凝らし、出でては諸山の高德に參禪したのみならず、本朝戰國策に、御本丸に御座被ㇾ成るも、御座の間に一人も不ニ罷在一御次に斗り扣へありしは、禪學被ㇾ遊御障りか、とあるによれば、城中座間に在りて猶ほ默坐專念、禪理の研究に怠らざりしを察知すべし。而して公は、其の師事したる高德中、當山

七世宗謙禪師に負ふ所最も多きが如し。禪師の始めて當寺に入山するや、公は師の機鋒俊銳當るべからざるものありと聞き、微服して寺に到り、師に參見せり。公蓋し多年參究の結果大に得る所ありとなし、試みに之を挫がんと欲せるなり。時に禪師は、梁の武帝の達磨に見ゆるの公案を擧げ、法戰正に闌なりしが、突如公を顧みて曰く、達磨不識の意旨作麼生か會すと、所謂銳俊の機鋒、積水一時に高所より決し來るの概あり。公茫然答ふる所を知らず。默默之れを久しうす、師曰く太守尋常口吧吧地たり。這裏に到て作麼として說破せざると、再び喰ふ三十棒。公は曚然として冷汗背を霑し、慚服身の置く處を知らず、師は是に於て一道の光明を與へて曰く、此事相應を得んと欲せば直に大死一回して始めて得べしと、公退いて參究工夫數ケ月、一朝豁然脚跟下に大光明を認め得て頓悟の域に達せり。卽ち直に林泉寺に至り、默默不言の間、直に人心を指さんとす。宗謙禪師、公の來るを見るや否や曰く、太守は漆桶を打透せりと、公下拜す。是に至りて公は心胸廓然大

悟徹底し、禪機一段の自由を得たり。

とある。これによりて不識庵と號し、宗謙和尚の偏諱をとりてみづから謙信といふた。

達磨不識の公案といふは、達磨大師はもと印度の佛様で、佛正法をつたへるために、支那に御座つた。はじめて宮中にお迎へしたのが梁の武帝であつた。武帝は金陵にみやこし、佛心天子と尊敬されてゐた。

武帝は達磨大師を宮中にお迎へして、いろいろと問答したのち、

いかなるかこれ聖諦第一義

と問はれた。聖諦第一義とは、最上無上の佛法といふことだ。そのとき達磨大師は

廓然無聖

と答へられた。廓然とは夜がからりと明けはなれたやうにす、いはば明治大帝の

あさみどりすみわたりたる大空の
　廣きをおのがこころ共かな

の心もちだ。無聖とは、諸佛も聖諦第一義、衆生も第一義、平等平等といふことで、教育勅語の

斯道は實に我が皇祖皇宗の遺訓にして、子孫臣民の倶に遵守すべき所、之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らず

の心もちだ。我が皇祖皇宗も斯道のなりませる皇祖皇宗だ。子孫臣民も斯道のなれる子孫臣民だ。斯道と斯道にて、之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らず

といふ皇祖皇宗と子孫臣民だ。

佛法にていへば、三世諸佛も佛性を以て身となし、佛性を以て口となし、佛性を以て意となし、身口意三業が唯有一乘の佛性なるを三世諸佛といふた。このとき對立すべき一切衆生はない。諸佛のつねにこのなかに住持たる各各の方面に知覺をのこさずだ。

一切衆生も佛性を以て身となし、佛性を以て口となし、佛性を以て意とし、唯有一

乘の佛性なるを一切衆生といふ。このとき對立すべき三世諸佛はない、群生のとこしないにこのなかに使用する各各の知覺に方面あらはれずだ。

維摩經にいはゆる、一切衆生みな如なり。一切法もまた如なり、もろもろの聖賢もまた如なり、彌勒にいたつてもまた如なり、もし彌勒が受記をうるものならば、一切衆生もまた記をうくべし、といふものだ。

如とは平等を意味し、教育勅語の斯道のこと、佛敎の佛性のこと、この公案の聖諦第一義といふことにて、一と口にいへば、生佛一如といふことにて結跏趺坐の當體だ。

しかるに、武帝がいかに佛心天子と尊敬されるとはいへ、いまだかつて結跏趺坐したことがないから、拄杖子を咬嚼したおぼへがないから、いたづらに對待の二見に墮して達磨大師徹悃の慈訓をうけとることが出來ず、かさねて

朕に對するものは誰そ

と問ふた。あなたは生佛一如にして對待の二見をはなれてをると仰せられるが、現に

あなたは僧形にして當代の釋迦牟尼佛、わしは俗態にて一小國王であります。どうして平等平等といふことが出來ませうかといふて、應身の達磨大師のみをみて、法身の達磨大師をみぬ。法身の達磨大師をみることが出來ぬくらゐだから、三身卽一の達磨大師はなほさら相見することは出來ぬ。結跏趺坐の達磨大師を禮拜することはいよいよかなはぬ。かはいさうなものだ。達磨大師は婆心片片拖泥滯水して

不識

と示された。

不識の二字は、しらずと訓まず、棒よみだ。不の字は否定の言葉ではない。超越とか、脫落とかいふことだ。識とは情識とか、識神とかいふことで、妄想分別をいふ、されば不識とは情識をはなれよともいはず、すてよともいはず、ただ脫落することだ。

情識分別を脫落すれば、結跏趺坐のほかに三身卽一の如來はない、求むればすなはちしりぬ。羽がみるべからざることを、生佛一如だ。皇祖皇宗と子孫臣民と、之を古

今に通じて謬らず之を中外に施して悖らず、斯道と斯道だ。廓然無聖が容易にうなづける、と示された。

しかるに武帝はいまだ結跏趺坐したことがないから、つひに胸におちつかず、物わかれとなつたといふのが、達磨不識の公案の大體だ。

この不識の二字については、武家佛法の餘弊をうけて殺伐に、知るものか、とたたきつけたものだと釋し、あるものは、あひ逢ふてあひ知らずの意味だと釋するものもあるが、南天竺の香至國王の第三の王子とうまれ、宮中に成長して宮中の言談祇對に慣熟してをらせらるゝから、馬士同士の喧嘩口論じみたお言葉を知つて御座るはずがないではないか、いはんやすでに佛祖の位にのぼり、傳法救迷情の大慈悲心より西來あそばされ、たとひ小國たりとも、一國の國王に對して、知るもんか、などといふお言葉の出やうはずがないではないか、それだから承陽大師は、情識分別をはなれてみなされと示された。大慈悲心の血滴滴と口訣なされてをらせられる。

いま謙信公は、この不識を、いかに大悟徹底なされたか知らぬが、兎にかく宗謙和尚に印可されたのを見ると、相當に深入禪なされたのであらう。

されば曹洞禪で仕あがつたのが謙信公だ。謙信公は骨でもない、皮でもない、血でもない、何か、曹洞禪といふ皮だ、肉だ、骨だ、曹洞禪化した血だ、皮だ、肉だ、骨だ、謙信公の全身心が曹洞禪だ、したがつて策戰がみな曹洞禪だ。

してみると川中島の戰爭は、信玄公と謙信公と刀槍とのきりあひではない、臨濟禪と曹洞禪との戰爭だ。

信玄公の兵法は甲州流の兵法として今でも軍人界に活用されて、支那にもない西洋にもない、日本特得の戰術となつてゐるさうだ。

日清日露の戰爭もよくしらべてみると、坐禪した將校が存外おほいさうだ。

兒玉大將にしても、乃木大將にしても、知らぬ顏をしてはをらるるものの、實は南天棒に師事してうんと坐禪してをられる。

日清戰役も日露戰役も軍人かたぎ、その軍人かたぎは坐禪によつてえてをる。それがあたらしき兵器軍術に加つてゐるから日本軍はいつも百戰百勝なのだ。

しかし、この禪的精神は軍人にのみ、つたはつてをるのではない。茶の湯のうへにも、生花のうへにもつたはつてゐる。生花も禪、それが奥義になつてゐる。茶道の奥義も禪の口傳である。茶禪一味といふ本さへ出來てゐる。

それから毎あさ自分たちが洗面することだ。いま日本中で、あさ洗面しないものは一人もあるまい、そのもとは何人からはじまつたか。

私どもの洗面する規則は、釋迦牟尼佛がお立てになつてをられたので、洗面の規則がお經のなかにちやんと出てをる。

日本では洗面することを、どなたがはじめて敎へくだされたか、齒をみがくことは、榮西禪師からはじまつたとつたへられてをるが、洗面はまさしく承陽大師からはじまつた。洗面の卷に

日本國は、國王大臣老少朝野在家出家の貴賤ともに嚼楊枝嗽口の法をわすれず、しかあれども洗面せず、一得一失なり。いま洗面嚼楊枝ともに護持せん、補虧缺の興隆なり、佛祖の照臨なり。

とある。越前の大本山永平寺御開山承陽大師が、支那からお歸りなされ、釋迦牟尼佛のお經のなかから、洗面に關する規則を取り出して、一冊の正法眼藏洗面の卷をあらはされ、それから洗面するやうになつたのだ。

もとは信仰からおこつたことが、年つきをふるにしたがつて、信仰の方はわすれられて、仕事のみ殘つてゐることが澤山ある。いま洗面もその一つだ。

承陽大師は洗面によりて佛法の眞意義を御奬勵あそばされた。したがつて、その當時はみな信仰のうへから洗面したものだ。今日はその信仰をおき忘れて、洗面だけのこつてゐる。

その證據には、誰も朝おきて鏡をみてから洗面する人はあるまい、顏がよごれてを

る、よごれてをらぬにかかはらず洗面する。淨不淨にかかはらず洗面する。これが信仰から出た證據だ。淨不淨をはなれて洗面する。きれいだから洗面しない、きたないから洗面する、そんなことはない、きれいにても洗面し、きたなくとも洗面する、それを不染汚の佛行といふ。不染汚の佛行が信仰より來た證據だ。あらそはれぬものだ。

わしの心やすい人が、獨逸に留學した。歸朝ののち便所にゆかれても手を洗はない、奥さんがなぜ手をお洗ひになりませぬかとたづねると、平氣でどこがきたないかといふて洗はない、これをわしらの言葉では、きれいなのにとらはれたといふ。

このとらはれるといふことが一番きたないのだ。一番きれいなことは總にとらはれぬといふことだ。淨不淨を飛びこえて洗面するが佛法の信仰だ。不染汚の佛行だ。それをみなさんが實行してをる。

しかし、淨不淨にとらはれぬ不染汚の信仰は、大分以前からおきわすれて來て、單に洗面する事だけのこつてゐるが、洗面のもとは全く淨不淨を超越した信仰から來た

不染汚の佛行だ。

洗面して自分の氣もちのよくなつたとき世界もきれいになる。氣もちのよいときは散る花をみても歌となり、雨のふるのも俳句になる、何ら不足もなく悪癖もない。

これに反して、自分の心がくしやくしやするときは、花の散るのを見てもくしやくしやする、花は人を泣かせるために散るのではないがさうだ、ただ花の散るのをみたときばかりではない、雨がふるといふては小言をいひ、長大息をする。雨は小言をいはせるためにふるのではない、長大息をさせるためにふるのではないがさうだ。自分の心がすぐに世界に影響する。

一人洗面するときに庭の草木までも洗面してきれいになる。この信仰を承陽大師が洗面によりてをしへおかれたのだ。洗面が不染汚の佛行だ。

承陽大師は牛のつのの六七寸なるに、馬の尾を寸餘にきりたるを、馬のたてがみのやうに植えて齒をみがく、これは外道の法だと仰つしやつてござる。

釋迦牟尼佛の當時は、私どもが今もちゐてをる齒ぶらつしは、不淨なものとなしてもちゐなかつた。それが西洋にながれこんで、西洋から這入つて來て、今日は淸淨な佛器の楊枝はすてられて、不淨な外道用の齒ぶらつしでなくてはならぬになつた。

むかしの婦人がお齒ぐろつけるときもちゐられた楊枝が、釋迦牟尼佛や承陽大師のおもちゐなされた楊枝だ。

御飯をいただくと何かが齒のあひだにくすがつてゐる。それを楊枝のとがつた方にてのぞき、そののち房の方にて齒をみがく。

齒をみがくことがすんだら、房を持つて二つに割ると、刀のやうになる。それで舌をかく、赤くなるまでかく、齒をみがく法も、舌をかく法も釋迦牟尼佛がをしへおかれた。それを承陽大師が我が日本に弘通なされたのだ。

わしが小供のとき、他から來た老人が、お鹽で齒をみがき、その汁で目を洗ふてゐた。そのときは何ともおもはずにゐたが三千威儀經のなかに

汁は目をあらふ用にあつ

とある。

朝おきると、口中がねばねばする、その粘液のなかに、眼の樂になる分子がある。それにお鹽をまぜるから化學作用をおこして、いよいよ目の藥になる。今の醫師にとふと矢張り粘液のなかに眼の藥になる分子があるといはれた。

佛敎のなかに、醫方明といふて、醫學に關したことがある。釋迦牟尼佛は醫學までくはしかつたので、處方箋みたいな藥ばかり說いたお經がある。

齒をみがき、舌をかきをはりてのち洗面する。洗面するについては、お水を無駄に使はぬやうにするが好い。

お水をくむとき、柄杓を手桶にあてて、音をさせては可かぬ。柄杓のお水を洗面器にうつすとき、八分目あけて二分は手桶にもどしておくが好い。なあに水は澤山あるものだ、幾ら使つても好いといふ。さあそれが無道心の證據だ。無信心の證據だ。信

仰のうへからいふと、一滴のお水も粗末にしてはならぬ。

承陽大師は杓底の水なほをしむべし、八分目だけ使つて二分はのこしておけ、それは子孫の使ふお水だとをしへおかれた。有りがたいお言葉だ、柄杓のそこのお水、それを粗末にせず子孫のためにのこしておくが好い。

乃木大將は、いつもお水で洗面せられて、お湯で洗面なされたことはなかつた。あるとき名古屋の旅館におとまりなされ、翌あさ女中が洗面のお湯を持つてくると、副官が閣下はお水で洗面なさるから取りかえて來いと命じた。すると將軍はそれを制して、お湯でよしよし取りかゆるにおよばぬ、と言ひつつお湯で洗面なされた。

のちに副官がお尋ねすると、將軍はあのお湯を取りかえさせると、女中は何の氣なしに捨ててしまふ、お水でさへ粗末に出來ぬ、ましてお湯を捨てては勿體ないと仰つしやつたといふことだ。御注意のとどいたことだ。

乃木將軍はまへにもいふたとほり、南天棒につき坐禪せられ、無字の四十二關を透

過なされたお方だ。その將軍が平素お水で洗面なさる規則をやぶつてお湯にて洗面なされた。

上の人ほど禪をまなんでござる。禪をまなんだ人ほど底ぢからがある、物を粗末にせぬ。

今から五六年まへとおもふ。仙臺に齋藤某といふ人が、お地藏さんの銅像を三體建立し、一體は仙臺に、一體は菩提寺に、一體は永平寺様に納められた。

それが世間のお地藏さんとは全然おもむきをことにして、手には柄杓を持ち、その柄杓のうへに蜂がとまつてゐる。柄杓を持つてござるは、杓底の水なほをしむべしを象徴し、蜂は勤儉を標榜したものだ。

齋藤さんは、お地藏さんを信仰し、杓底のお水ををしみ、勤儉の二字をまもられたので、財産をつくつた。それを記念すべく三體のお地藏さんを作つたのださうだ。杓底の水なほをしむべし、有りがたいお言葉だ。

わしの寺でも始終女青に言ひきかせてをることだが、お小遣ひを壹圓いただいたら
ば、八十錢だけ使つて、二十錢を預金せよ。五回目には壹錢いただかずとも、お小遣
ひが八十錢ある。お小遣が長いきするわけだ。

佛法ではお水を自分たちの智慧としてゐる。お水をただくさに使ふ人は、自分の智
慧を無駄に使ふ人だ。自分の智慧のたりぬくせに、智慧以上の欲望をおこして、失敗
し失敗し神經衰弱になる。さればお水を使ふところに、その人の一代を豫知すること
が出來る。運命は杓底のお水ををしむところよりわき出づるだ。

すべて人は貴重品だと粗末にしない、それは當然だ。お水は幾らでも出るからどう
しても粗末にする。有りあまる物を粗末にせぬところに德器を成就する。德器とは自
分の實踐躬行のたまものの名だ。

知つてゐます解つてゐますといふは智能の方で德器には入らない。德器はたとひあ
りあまる物でも粗末にしない。有るにもとらはれず、無きにもとらはれず、どちらに

もとらはれない不染汚の佛行、そこに自分たちの信仰があるのだ。杓底の水なほをし
むべし。お水は決して粗末には出來ない。

わしは餘所に行くと、洗面器に滿滿とお水を持つて來てくれるにはよわる。仕かた
がないから手洗鉢にうつすとか、植木にかけるとかしてのちに洗面することにしてゐ
る。

洗面するところから德器を成就する。ここに偉大なる信仰があらはれてくる。淨に
もとらはれず、不淨にもとらはれず大にもとらはれず小にもとらはれず迷にもとらは
れず悟にもとらはれず、生にもとらはれず、佛にもとらはれず、總に束縛をうけない、
不染汚の佛行、そこに信仰があらはれ、德器を成就する皆さんが洗面するそのときす
でに德器を成就してゐるのだ。

いま話をきいてさういふものかなと思ふとき、もとの信仰にかへることが出來る。
淸淨にても洗面する、不淨にても洗面するといふことが、朝おきたときの一つの信仰

だ。洗面の巻に

佛祖の修證を保任するとき用水洗浣以水澡浴等の佛法つたはれり。これによりて修證するに、淨を超越し、不淨を透脫し、非淨非不淨を脫落するなり、しかあればすなはち、いまだ染汚せざれども澡浴し、すでに大清淨なるにも澡浴する法は、ひとり佛祖のみに保任せり。

とある。この信仰にかへるとき、禪的生活だ。禪的生活するところに、洗面の價値がわかつてくる。一人が淨不淨をはなれて洗面するところに、庭の草木はいふにおよばず、世界中がきれいになる。世界中が自分の心のごとくになる。そこでありがたいことだといふことになり、信仰にかへることが出來る。

手拭は三尺にきまつてゐる。わしどもは手巾といふて一丈二尺だ。それは洗面するにころもの袖が邪魔になるから、手巾を襟からかけおろして腋の下をとほしてうしろにやり、うしろにて引きちがへて前に出し、兩袖をくくりあげてころもをよごさぬやうにする。それを四つに切つたのが三尺の手拭だ。

されば三尺の手拭をつかふことは、禪的實生活だ。いやしくも三尺の手拭をつかふ以上は、禪をはなれることは出來ない。禪をはなれては私どもの生活はない。

それからもう一つこれは話しにくいが、承陽大師は便所に行く方法を正法眼藏洗淨と題してお示しくだされてある。

便をととのへるについては、お水を手桶にくんで持ちこみ、便がすんだら、そのお水でよく洗ひきよめ、そのあとを天竺にては、竹のへらにてぬぐひ、日本にては紙を以てぬぐふ。承陽大師はかくのごとく紙を以てお尻を拭ふことまでをしへおかれた。

ふるい家には、手洗鉢のしたに小石が四つ五つおいてある。それはお水を以て、便のあとを、手にて洗ふから、臭氣がのこる。そこで手にさいかちの粉をつけて、こすりながら洗ふ石だ。それが今はお庭の裝飾品になつた。

承陽大師はさらに便所にも共同用の手拭あり、洗面所にも共同用の手拭がある。共

同用の手拭をつかつても好し、自分の手拭をつかつても好しとまでをしへおかれた。共同用の手拭まで禪から出てゐるのである。

かくのごとく一日のうちにどうしてもやらねばならぬことがみな禪から出てゐる。誰もいふて聞かせぬから知らずにをるが、その知らずにやつてをることがみな禪だ。みなさんの生活から禪を引き去つたら沒趣味の生活になつてしまふ。

道具にしても、建築にしても、工藝にしても、園藝にしても、禪とともに支那から這入つて來たとか、佛教とともに朝鮮から這入つて來たものがおほい。

今日しらず知らずのうへに行はれてきた事が、はじめは信仰から來たものがおほい。それが七百年八百年、もしは一千年たつあひだに、信仰は忘れられてしまつて、かただけのこつてゐるが、みな禪の恩惠をうけてゐる。佛教をきらひ、禪をとり去つては、清淨な生活、意義ふかい生活はないことになる。

今日の生活を無意義にせず、意義あることにする、徹底せる道念のうへからやる、

獨拔せる確信のもとにやる、淨不淨を脫落し、悟不悟を脫落し、迷不迷を脫落し、美不美を脫落し、味不味を脫落し、一切の相對を脫落し、あらゆるものにとらはれぬ不染汚の佛行、それをしつかり呑みこまれたらこれくらゐ安心はない。

わしどもは、心の落ちつきが大切だ。心の落ちつきは一切の相對をはなれるにある。一切の相對をはなれるは、信仰よりほかにない、禪的生活よりほかにない。

教育勅語の表面には、明治大帝の御信仰が見えないが、御製の一首一首がみな御信仰からあふれ出てをる。

あさみどりすみわたりたる大空の
廣きをおのがこころ共かな

この偉大なる御信仰を拜まねばならぬ。

罪あらばわれをとがめよ天つ神
民はわがみのうみし子なれば

さういふ御信仰である。ことに明治大帝は、お觀音様を御信仰あそばされたるやうにうけたまはる。

佛様を御信仰あそばされ、神様を御信仰あそばされた明治大帝が、世界的人格者であらせられた。その御信仰があさみどりの御製となつた。大空には國境はない、偉大なる御信仰だ。明治大帝の御信仰、それが明治大帝の偉大なる御動作である。

教育勅語のうへに御信仰が見えぬからといふて、明治大帝に御信仰がなかつたのではない、教育勅語を御發布あそばさるる當時わが國は、教育と宗教とを各別にして取りあつかつたから、教育勅語のうへには御信仰が見えなかつたのである。明治大帝の偉大なる御信仰はあさみどりの御製のうへに潑剌としてあらはれてをるではないか。

その御信仰が二字につまつて斯道となつた。之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らず、それがあさみどりの御製となつた。あさみどりの御製がつづまると斯道の二字となる。斯道には國境はないから、東洋平和のためとなり、社會の平和と

なつた。みな御信仰から出發してお出でなさるではないか。

これから考へると、わしどもはまづ他を愛することが肝要だ。同時に自分の村ほど尊いものはないといふ愛鄕の信念が猛烈でなくてはならぬ。猛烈なる信念がなくなると、その村はほろびる。自分の村を一つの人格者にしてしまふことだ。

戸數をいふではない、人口をいふではない、ただ與布土村といふ人格者にしてしまふことだ。どこに行つても誰が見てもあれは與布土村の青年だといふその人格をつくらねば駄目だ。

自分ひとりよければといふやうではその村は發展せぬ。まづ他人を濟度し、それから自分のためにする。自他ともに發展する。それでなければ、村の發展を期することは出來ぬ。

いま一つは、今日までのやりかたを全然あらためることは出來まいが、社會の發展にともなふてゆくことが必要だ。この村の村ぎめを生かしてゆく、わしどもの家憲だ

といつまでもそれを死守してゐては發展の仕やうがない、昔から手を以て田の草をとつてゐたからといふて、文明の利器を應用せぬやうでは社會から取りのこされて、人伍におちてしまふ。美風はのこしておかねばならぬが、社會の發展にともなつて行くことをわすれてはならぬ。

この與布土村には、明治のころ越溪禪師といふ臨濟宗の知識がをられたさうだ。老人がたは越溪禪師の逸話を知つてをられる方もあらう。その逸話はこの村の發展上なくてはならぬ。いつも越溪禪師から御指導をうけてゐたことをお手本としてもらひたい。これは越溪禪師にかぎつたことではない。

我が國は神武天皇陛下よりこのかた、政教一致といふて、政治と宗教とが一つであつた。御代代の天皇陛下、および歴代の忠臣、それらがみな私どものお手本で、このお手本をなくしてはならぬ。

お手本とあふぐべき古徳もしは先輩は決して呼びすてにしては可かぬ。大楠公と

か、新田公とかいふやうに敬語をもちゐる。自分が第二のその人にならうといふくらゐ景仰してをるならば、何としても敬語をもちゐずにはをれないのだ。妙なもので、平生敬語をもちひてをるといつとはなしに自分がその人になつてゐる。大楠公大楠公と敬稱して渇仰戀慕してをるうちに、いつとはなしに自分が大楠公になつてしまふ。

幕末の名士橋本左内さんが、宋朝の忠臣岳飛公を敬慕し、みづから景岳と號し、大西郷らとしたしく交り勤王に終始した。大西郷も岳飛公を敬慕し、その書風をまなんだ。勤王家が忠臣の書風をまなんだのだから、書風ばかりまなんだのではあるまい。岳飛公その人をまなんだのであらう。橋本景岳さんと意氣投合するは當然の當然たるものだ。

敬語をもちゐられぬくらゐの人ならばお手本にしないが好い。

承陽大師は米を呼びすてにするな、およねとまをしたてまつれと仰せられ、米をとぐといふな、およねをかしぎまゐらせよとまをしたてまつれと仰せられた。まづ自分

たちはどれだけお米の恩恵をうけてをるか、自分のいのちを養ふていただくお米をいたづらに米といふて侮辱することは可かぬ、口では萬物の靈長なりとりきんでをりながら、どこが靈長の靈長たるところか解らぬやうではならぬ。

このあひだ越後できいた話だが、農林學校を卒業した青年が、あさ鍬をかついでお仕事に出るときは、まづ手をあはせて鍬を拜み、晩にもどりて鍬ををさめるときは、また鍬のまへに合掌し、頭をさげられた。それを見やう見まねして、その郡内の青年が感化されて、幸福になつたといふことだ。これはその農林學校の創立されたとき、お寺を借りてゐたところから、朝夕お寺の勤行に感化されたものだらうといふてゐた。鍬に向つて合掌低頭する、何といふ奥ゆかしいことであらうか、その鍬にすかれた田畑は、どんな實をむすんだであらうか。

村を大切にする。それについては興布土村かたぎをつくるのは好い、興布土村かたぎをつくるには、三箇條の要件をまもらねばならぬ。

第一には、村民と村民とあひ信じ一致團結しお互に他を排斥せぬやうにすること

第二に、從來の美風を保護し而かも社會の發展にともなふて行くこと、もしは一歩ささんずること

第三に、古德または先輩のあとをつぎその人を以てみづから任ずること

この三箇條が行はれたら、この村は生れかはることとおもふ。

同時にふかくふかく自分自分の職業の神聖なることをみとめ、かたくかたく信じ、絶對に自分の職業以外に、神聖なる仕事はないと、腹をきめることだ。

大西郷が維新の大元勳であるといふことは何人もみな御承知のとほりだ。しかるに維新の大業が成就してしまふと、鹿兒島にかへり、馬士をやる、肥え桶をかつぎ、恩金全部を以て田地を買ひ、私學校を立て、青年を教育した。西郷南洲先生傳に

學校の本領とする所は、先生の手記にかかる左の二箇條の要義に據りて明である。

第一　道同じく、義協ふを以て、暗に集合す、乃ち益す、其理を研究し、道義に於

ては一身を顧みず、必ず踐行すべし。

第二　王を尊び、民を憫むは學問の本旨なり、乃ち此理を究め、王事民義に於ては、一意難に當り、必ず一同の義を立つべし。

又吉野の原野に就き、生徒等自ら草莽を開拓し、穀類甘藷等を播植した。先生も自ら馬を曳き、鋤を荷ひ、耕作に從事せられ、又西別府村の別墅に茶桑等の栽培を爲し、殆ど純然たる農夫の生活狀態であつた。

斯の如く士氣を鼓舞し、尊王の大義を敎へ、殉難救民の大道を奬勵し、又自ら率先し、耕稼の業に從事せられたのは、一には壯年子弟等の過激なる精神を緩和し、一には自ら農事に從事し、士族に歸農の道を敎へて、國家百年の大計を覺らしめんとの深謀遠慮に出でられたのであつた。

かくのごとく率先して、躬を以て青年子弟を薰陶せられたから、いや應なしに、大西鄕の精神が青年につたはつて、一人り一人り大西鄕となつた。かうなくては本當の敎

育したとはいへぬ。

承陽大師のお言葉に、無師獨悟なり、無自獨悟なりといふがある。無師獨悟といふは、師をまたず自由討究するといふことではない、師が面授すれば弟子が面受し、師が眼授すれば弟子が眼受し、師が身授すれば弟子が身受し、師が心授すれば弟子が心受し、師の身肉手足頭目髓腦光明轉法輪が弟子の身肉手足頭目髓腦光明轉法輪となり、弟子の身肉手足頭目髓腦光明轉法輪となる。たとへば、迦葉尊者が、したしく釋迦牟尼佛を供養恭敬禮拜奉勤したてまつり、その粉骨碎身いく千萬變といふことをしらず、迦葉の面目は迦葉の面目にあらず、如來の面目を面授して師の師とすべき面目もなく、弟子の弟子とすべき面目もなくなつて、ふぢのつるとふぢのつるとからみあつて、一つになつてしまつたことをいふのだ。ちと難かしいが葛藤の卷に

迦葉傳與阿難の時節を當觀するに、阿難藏二身於迦葉一なり。迦葉藏二身於阿難一なり。

しかあれども傳與裏の相見時節には換面目皮肉骨髓の行李をまぬかれざるなり。こ

れによりて且道へ達磨傳ニ與什麼人一としめすなり。達磨すでに傳與するときは達磨なり、二祖すでに得髓するには達磨なり。

といふもの、師も達磨なり、弟子も達磨と達磨なり、教育した人が教育されたものになつてしまひ、教育されたものが教育した人になつてしまひ、教育者と被教育者とからみあつて、ふぢのつると、ふぢのつるだ。それだから、無師獨悟のときは、無自獨悟だ。私學校の生徒が、一人一人大西郷と大西郷で、大西郷ばかりだ。それが本當の教育だ。

つまり教育したといふは、教育した人と、教育されたものと、同一人格になつてしまはなければ、教育したのではない、教育した人の全人格が、生活にあらはれて來なければ、教育したのではない。

御自分で肥え桶をかつぎ、馬を曳くところを見ると、土百姓だ、赫赫たる功烈をみると大元勳だ。土百姓にもとらはれず、大元勳にもとらはれず、總にとらはれぬ不染

汚の佛行、そこに大西郷の大信念があらはれ、坐禪の功德が光明をはなつてゐる。

大西郷は十七歳のときより、大了無參和尚（俗姓は蘆谷氏）について坐禪をやりぬいた人だ。無參和尚は城下から一里半ばかりへだたつたところの南林寺に住してをられた。大西郷は夜のあけぬうちに、南林寺に往つて坐禪し、もどつて來てもまだ夜があけぬ。誰もしらぬあひだにぐんぐん坐禪してゐた。

そのうち吉井友實さんに感づかれ二人り連れだつて一緒に參禪した。

無參和尚はのちに島津公の香花所福昌寺に晋住し、鹿兒島にうつられたから大西郷はお城をさがるといつも福昌寺に往つてゐた。

あるとき大西郷は、吉井さんにむかひ、いつもいつも和尚にどやされるから、今日はどやされぬやうに仕やうではないかといふて、いきなり玄關にぽつたつて問答した。すると無參和尚は、大聲叱咤、天地もわれよとばかり、このなま意氣ものめと怒鳴られた。そのこゑに驚いて二人とも飛び出して、やがて半道も一目さんに走りづめ

に走つて、ため息をつき、氣がついてみると、二人りとも草履を手にさげてゐたといふことだ。

そののち大西郷は、大小の戰爭にこはいとおもつたことはなかつたが、無參和尙に怒鳴りつけられたときは耳が打つさけたかとおもつたといふては話されたさうだ。それで大西郷の腹がきまつたのだ。

無參和尙と大西郷とに關しては西郷南洲先生傳に

その頃鹿兒島に薑谷無參といふ禪僧があつた。吉井友實の叔父に當る人である。初め南林寺の住職より福昌寺の住職に轉じ、後、城西草牟田に誓光寺を創建して退隱した。無參人と爲り學識深遠にして德高く、又勤王の志に富み實に毅然たる高僧であつた。先生少閑あれば則ち師の門を叩きて禪學を修められ、大に精神の鍛錬に努められた。先生の膽略世にすぐれ、死生の上に脫出して名利の外に獨步せられたのは、禪學修養の結果である。

當時先生は多くの學習の門弟があつたが、每朝先生は誓光寺に到りて禪學を修め、家に歸りて敎授するを例とせられた。大山巖等は門弟の一人であつたのである。先生の出府の機會なく、尙小吏を勤め、時時無參及法嗣日參（安按日參正實參誤）の門を叩いて禪學を修養せられ時期を俟ちて居られた。

とあるを見れば、いかに大西郷が、坐禪辨道に精勵なされたかを、うかがひ知ることが出來る。

大西郷は三ど島ながしにあひ、公用なきまゝに坐禪ばかりしてゐた。その坐禪が維新の大業を成就したのだ。大西郷の曹洞禪、曹洞禪の大西郷が御一新をやつた。

幕府が江戸を開城するとき、朝廷からは三人の公卿が受けとりに行き、大西郷は參謀長であつた。幕府からは大久保一翁さんが引き繼ぎに出て、すでに引き繼ぎがすみ、公卿さんを玄關まで見おくつて歸つて來てみると、大西郷はまだ坐禪したまゝゐねむりしてゐた。大久保さんがその肩をたたき、引き繼ぎのすんだことをつげると、大西

郷は何ともいはず、のそりのそり出て行つた。敵のなかにゐてよく出來たものだ。

この大西郷が、肥え桶をかつぎ、馬士をしてゐた、これで信仰といふことが、どれほど人生に影響するかを考へてみなさい、その力がどこから出て來たか、いふまでもなく坐禪から出て來たのだ。

みなさんに坐禪せよといはば難かしいといふであらうが、信仰は心機の一轉にある。自分の持つてゐる如來の智慧と如來の德相をぢいつとながめ、電光石火裏に自分をみとめるのだ。誰にも出來るからやるが好い。

まづ自分の職業以外に、仕事をみとめぬ。馬士のほかに仕事をみぬ。馬士が神聖なり、肥えかつぎのほかに仕事をみぬ。肥えかつぎ神聖なり。わがいま從事してゐる仕事以外に神聖な仕事はないと安心決定したときが、みなさんの人格完成のときだ。成佛したときだ。

幾ら都會に住つたとて、路ばたにお金がころがつてゐるものではない。

わしは五年のあひだ横濱を托鉢したから、裏だなまで知つてゐるが、壹錢のおあしでも路ばたにおちてはゐなかつた。

平沼專造さんの何百萬といふ財産は、黑船につんで來た石炭を、一荷貳錢づつにてかつぎためた財産であつた。汗をさらひ勞働をいとふやうなことで、財産の出來るものでない。

この村を愛するならば、自分の職業を信ずるのだ。自分の職業を以てわがいのちとなし、自分の職業以上の神聖はないことを信じぬき、自分の職業と同生し同死して、生生世世をつくすが好い。

藥鑵を火にかけてはおろし、かけてはおろししてゐては、いつまでたつても煮えたつものではない。持久が必要だ。精神をあちらにうつし、職業をこちらにうつしてゐては、いつまでたつても成功する時期はない。何でも自分の成功するまでやりぬくことだ。

自分のいのちを打ちこんだ仕事も、社會の進歩にしたがつて、改良に改良をくはへて發展して行かねばならぬ。一人があつまつて村をなし、村があつまつて縣をなし、縣があつまつて國をなす、一國は一人のあつまりだ。このゆゑに一人の信仰が一國の信仰になる。一人が一國の基本になるのだから、われ一人の信仰をわれ一人の信仰と考へてゐてはならぬ。それゆゑ、まづ一人一人が、自己の職業が神聖なることを自覺するが好い。それにはまづ自己を信ずることだ。

自己をいかやうに信ずべきか、自分はたしかに之を古今に通じて謬らずといふ智能と、之を中外に施して悖らずといふ德器との合成であるからだである。わしどもに皮はない、肉はない、何だ、斯道がかたまつて出來てゐるからだだ。斯道といふ皮だ、肉だ、いつまでも智能を啓發することが出來る。どこでも德器を成就することが出來る。之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らず、道理＋德器＝道德といふからだだ。かくのごとく自覺しかくのごとく信じ、かくのごとく行じ、かくのご

とく證するのだ。

わしの本師は、人の智慧と井戸の水は使へば使ふほどあたらしい水が出る。よい智慧が出るとをしへて丁ど獨樂をまはすやうに、次ぎから次ぎにと難かしいことをさせられた。いやでもあたらしい智慧を出さずにはゐられない。また智慧が出るものだ。

つまり可愛がるといふことに二種ある。その一はお菓子をあたへ、あまやかして可愛がること、その二は次から次ぎにと難かしい仕事をやらせてあたらしい智慧を出させ、智能を啓發し德器を成就して、圓滿なる人格者にそだてあげることだ。それには自分を知ることだ。自分は道理＋德器＝道德で出來てゐる。明治大帝は、朕汝臣民と倶に拳拳服膺して咸其德を一にせんことを庶幾ふと仰せられてある。朕も行はせたまふ、なんぢ臣民もやりなされと仰せられた。

されば明治大帝の御實行あそばされたることは、私どもにも出來るはずだ。もし出來なかつたらば教育勅語をうらぎる人間に、はた

して天壌無窮の皇運を扶翼しえらるるであらうか、忠良の臣民といふことが出來るであらうか、そこで十二分に自己を自覺するだ。ふかくあつく自己の智能と德器を信じきるだ。

使へば使ふほどあたらしい智慧が出てくる。見世の品は賣りきれることがあるけれども、いまだかつて智慧が賣りきれたといふことを聞いたことはない、いまだかつて智慧が種子ぎれになつたといふことはない。行きつまりはあるが、品ぎれはないはずだ。種子ぎれはないはずだ。一旦ゆきつまつても、しばらくたつとまたあたらしき智慧が出て來る。

一つ善い事をすれば、その善い事が次ぎの善い事を呼び出して來る。一ど優勝旗をとると、またこの次ぎも優勝旗をとらうといふ勇氣が出る。優勝旗が優勝旗をよぶ、智慧が次ぎの智慧をよびやらずにはをれなくなる。それだから自分の智慧を確信し、自分の德器を確信せぬと可かぬ。

確信するところにおいて、人格を養成する、人格にとめどはない、人格は無限だ。智能も無限なれば、德器も無限だ。誰も人格の向上を妨害するものはない。遮斷するものはない、どれだけ發展しても、向上しても、妨害するものはない。また遮斷することの出來るものでない、無限に向上するが好い。

それには、明治大帝の高德をしたひたてまつり、祖先以上の忠をつくし、孝をつくし、社會公共の事業に精進する。そのときはじめて天壌無窮の皇運を扶翼することが出來る。忠良の臣民となり、祖先の遺風を顯彰することが出來る。それを確信し、それを實行したとき、このからだが天壌無窮の皇運といふからだになつてしまふ。

いやしくも天壌無窮の皇運といふからだが寄りあつまつて、七千萬といふ人口となり、日本の國をかたちづくつたとき、どんな國が出來るか、そのもとは一人一人の信仰があつまつて、禪的生活といふ與布土村かたぎをなし、それが擴大して七千萬人が一團となり、確信淨信といふ天壌無窮の皇運となる。これでこそ、日本の亡びやうは

あるまい。たとひ快速をほこる飛行機たりとも、たとひ精鋭をきはめたる軍艦たりとも、いかんともすることは出來まい。これがわが祖先以來やしなひきたつた日本精神である。國體の精華である。これを發揮するごとに祖先の遺風を顯彰することが出來る。明治大帝の御期待にかなひたてまつることが出來る。

それにはどうしても自己を自覺するだ。まづ自分の職業の神聖なることを自覺し、難苦と逸樂とを脱落し、清淨と不淨とを脱落し、生佛と迷悟とを脱落し、不染汚の佛行に精進し、皇室を尊崇し、國家を保任し、三世の諸佛の佛法に依遵し、歴代祖師の祖道を慕古し、よのつね禪的生活を以て、生生世世をつくし、身身心心をつくし、天地の撲落することを期するが好い。

この法話は昭和八年九月九日兵庫縣朝來郡與布土村教化團にて講和せし筆記をさらに補訂せしものにかかる。

昭和八年十二月五日　印刷
昭和八年十二月八日　發行

著者　岸澤惟安
東京市芝區新橋五丁目四番地

印刷兼發行者　今村延雄
東京市京橋區銀座西八丁目五番地

印刷所　民友社印刷所
東京市芝區新橋五丁目四番地

〔定價　金拾五錢〕

發行所　鴻盟社

丘宗潭老師述
岸澤惟安師筆記

改訂佛祖正傳 禪戒鈔講話

定價 一圓五十錢
送料 十四錢

洞上安心の根本問題たる禪戒一致を談ずるの書は古來極めて稀れである。これは禪戒を參究した知識が寥々晨星よりも少いからである。本書は西有穆山禪師の提唱を親しく聽聞された丘宗潭老師が、獨參實究、幾度か禪戒鈔を提唱し、且つ梵網經略抄と照合して研究された結果が、改訂禪戒鈔となつて現はれ、更に、一般の解了を容易になさんとの老婆心より講話されたものを侍者岸澤惟安師が筆記したものである。

岸澤惟安老師述

修證義大綱講話

定價 一圓五十錢
送料 十四錢

曹洞教會修證義は佛教聖典中最も平易に正傳の佛法を說き示された御文章で、深遠難解とされた佛教の極意も此の修證義によつて容易に體得することが出來るのである。本書は眼藏家としての第一人者たる岸澤老師が、深い學識と從るゝ禪機とを以て親切にその大綱を講述されしもの、日本の佛教徒は宗派の如何を問はず一人一本を座右に備ふべき好著である。

丘宗潭老師述
岸澤惟安師筆記

霞丘老漢說戒

定價 五十錢
送料 六錢

前曹洞宗大學長丘宗潭老師は西有門下の第一人者として道元禪師の正法眼藏をそのまゝ承當された禪門近代の英傑である。古來禪と戒との關係は頗る難解なものと思惟されて居たが、老漢の說戒を拜讀するに及んでは從來の疑團を氷解し、三歸、三聚淨戒、十重禁戒の見方、さばき方に、おそらく一大轉向を餘儀なくされるであらう。

岸澤惟安老師述

正法眼藏菩提薩埵四攝法卷 葛藤集

定價 一圓三十錢
送料 十錢

道元禪師が菩薩の行願たる四攝法を眼藏九十五卷中の一卷として說かれたのは理論の爲の理論でなく出家在家の菩薩が實行すべき極めて重要な眼目を示さんが爲である。老師の講話頗る平易にして譬喩より官話あり因緣物語あり、洞宗の道俗に限らず大乘佛教の眞髓たる菩薩道の眞精神を知らんと欲せば先づ本書を見られよ。

岸澤惟安老師述

正法眼藏 行持卷葛藤集

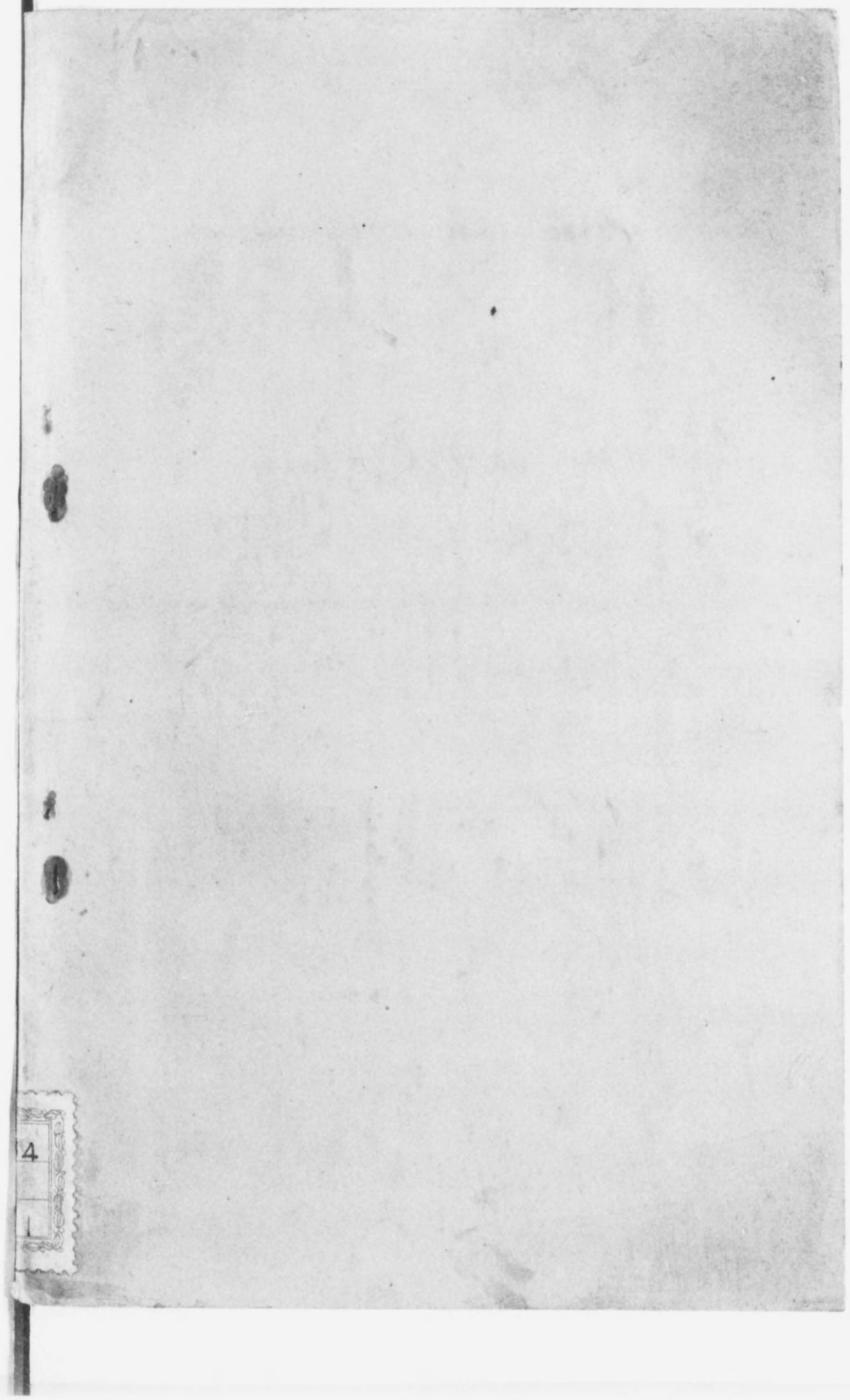
近刊

佛法は行持によつて生命がある。行なき信仰や學問は死んだ哲學であるに過ぎない。釋尊も入滅に臨んで「展轉してこれを行ぜば如來の法身常に在して滅せざるなり」と遺誡された。これ正法眼藏九十五卷中に行持の卷ある所以である。葛藤集とは岸澤惟安老師の講話提唱に名づけたるもの、目下盛に御執筆中である。

岸澤惟安老師述

典座教訓葛藤集

近刊

禪家叢林の生活に於ける典座の一職は、軍隊に於ける炊軍曹であり、家庭に於ける主婦の役目を司るものである。典座教訓は道元禪師が親しく、綿密に典座の心得をお示し下された禪門淸規の一つであるが、今や岸澤老師によつて最も平易に、講述せられ、何人にも禪家の淸規が理解され且つ現代の生活に應用されることは喜ばしいことである。

終